



黒髪と清潔：
明治中期～大正にかけての婦人衛生雑誌から読み解
く黒髪の変遷

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 友子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00002908 |

黒髪と清潔

—明治中期～大正にかけての婦人衛生雑誌から読み解く黒髪の変遷—

横山友子

I. 研究背景

清潔とは、一般にはよごれがなくきれいなこと、衛生的なこと¹を指す。この定義に示されるように、今日「清潔」は「衛生」と強く結びつき、抗生物質や消毒といった、医薬品の使用と切っても切り離すことのできない概念となっている（奥野 2006）。現在の日本の公衆衛生は設備・制度ともに質が高く、世界に誇れるほどであるが、公衆衛生が国家的な事業として推進されはじめたのは明治期に入ってからである。明治政府が公衆衛生を推し進めた背景には、開国をしたことにより、コレラをはじめとするさまざまな伝染病が流行り多くの庶民が罹患し人口減少にまで影響を及ぼしたこと、欧米諸国との差を無くすために文明国としての世界的認知を図ったこと、そして積極的に富国強兵に取り組んだことがあげられる。公衆衛生の推進は個々人の健康を願い病気を予防することではなく、人口に対する羅病をリスクの管理対象としたものであり、そのために公衆衛生や予防医学などの近代医療が行われるようになった。近代医療の普及は、国家内部における「生権力」の行使にかかわっていた（奥野 2006）。この「生権力」の行使は国民国家形成のプロセスと密接にかかわり、男性の身体は学校教育や軍隊を通して、産業部門や軍事部門に適応するように統制されてきたのにたいして、女性の身体は出産・育児を通して国家の再生産にかかわるように馴致された（中畠 1990）。

他方で女性の身体にはまた、国民国家の「文化・伝統」を体現するものとしての役割も押し付けられてきた。頭髪についても例外ではない。明治政府は明治4年に男子の断髪令を発令し、鬘を続ける者には見つけ次第取り押さえて丁髷を切り落とすという強制を徹底した（大原 1988）。これによって、明治10年には男子の鬘は廃絶に近づいていった。男子に続き、女子の中にも断髪する

¹ 広辞苑第六版 2009 岩波書店

ものがあらわれたが、女子の長髪を男子同様に断髪する者に対しては批判がなされ、明治5年に女子断髪禁止令が布達された（江馬 1953, 平松 2012）。断髪禁止令は、今日の軽犯罪法に似た取締法規であり、巡査にみつかりと罰金を収めるか、警察署に拘留されるというもので、あきらかな封建社会の男尊女卑の生活秩序そのままを明治政府が強いた法である（岡 1981, 平松 2012）。当時の日本髪は松脂と胡麻油の蠟に香料を混ぜた鬢付け油が使用され（鈴森 2010）、髪を洗う時には、鬢を固めていた多量の油や付着した汚れを取り去るのに半日かかった（平松 2012）。不衛生と不便さが伴う日本髪を継続させることは公衆衛生を徹底させようとした生権力は異なるベクトルを示すものである。

髪型や黒髪については、美意識の構築についての研究がされているが、頭髪に関わる清潔意識についての先行研究はない。本研究は、日本女性の身体中に、国家の再生産と伝統・文化の担い手という異なるベクトルをもつ役割が、どのように組み込まれていったのかを、明治中期から大正末期にかけて刊行された婦人雑誌を用いて、女性の髪型と洗髪に関わる言説の変遷を通して探る。次章は「髪型の変化」と「衛生の啓蒙活動」について先行研究をレビューし、分析対象とする『婦人衛生雑誌』の位置づけを述べる。第三章は『婦人衛生雑誌』における女性の黒髪に対する啓蒙の内容の変遷を分析する。結論では『婦人衛生雑誌』が衛生思想の普及を目指し、黒髪の清潔に関してどのように啓蒙活動をおこない女性の身体に介入したのか、時代背景と啓蒙内容の変遷から明らかにしたい。

Ⅱ. 髪型の変化と衛生の啓蒙活動

1. 髪型と黒髪の変化

黒髪と清潔の形成過程に関する研究をするうえで、女性の髪型の変化とその社会的・文化的な背景を述べておきたい。日本人の髪型は時代とともに大きく変化し、それにつれ、整髪に使用された道具、髪油や飾りも発展し、洗髪の手易さも変化をしていった。

平安時代の貴族文化から女性の髪型は自然の垂れ髪となり、室町時代までこの垂髪は続いた（橋本 1981, 飯島 1986）。長く豊かな黒髪は、女性美の象徴として、また妖艶な魅力の源泉として、歌い描かれ（高階 2015）、髪は女の命とみなされ、女性の美しさの第一条件とする価値づけがあった（飯島 1986）。一方で、黒くない髪、短い髪は不美人の象徴であり（平松 2012）、加えて髪が短いことは、労働に適した軽快な服装と共に身分の低い女性であることを示していた（橋本 1981）。身分の低い女性にとって長い髪はあこがれであっても、装うことが出来ない髪型だった（飯島 1986）。ガスも水道もない時代に労働階級に属した身分では、ゆっくり髪を梳いたり、半日以上要する髪洗いをしたりして手入れをする余裕はなく、何よりも労働しやすい髪でいることが自然であったと考えられる。

江戸時代には髪型が垂髪から結髪へと変化し、髪を束ねるという実用性を加え動きやすさが取り入れられた（江馬 1953）。そして植物油に蝋燭や松脂を混ぜ、香料を加えた鬢付け油が普及し（鈴木 2010）、結髪の技巧は精巧となり、鬢の種類も増加し、年齢、職業、階級、未婚、既婚、未亡人などにより区別され、髪型はアイデンティティーとしてより細かな情報を外見から提供するものとなった（江馬 1953）。明治時代になっても女子の生き方を指南する書では、丸鬢などの結髪の美しさを強調し（君塚 1929）、その美しさは「女らしさ」であり、女であるならば目指すべき理想像として語られている（鈴木 2002）。しかし、江戸時代からの伝統的な結髪は、窮屈で重苦しく、髪型を崩さないよう高枕で寝るために安眠ができないうえに髪を気にして動作が制限され（君塚 1929）、女性の社会進出を妨げるものであった。上述の明治政府の女子断髪禁令は、このような黒髪の変遷のなかで女性の江戸時代の髪型のみを「日本の伝統」として位置づけ、女性に強要するものであった。

鹿鳴館時代で上流社会に洋装が取り入れられるようになると、束髪も徐々に広まっていった（江馬 1953）。しかし日清戦争が始まると洋臭の束髪は西洋の模倣であり、弾圧され、髪型は日本化するようになった（江馬 1953）。日清戦争後には日本髪と束髪が巧みに調和した新様式の束髪が考案されたが（江馬 1953）、下町には日本髪を好む人も多く、従来髪型も根強く残った（大原 1988）。大正期には巻束髪が流行し、日本式束髪が全盛期で、従来日本髪は凋落を見

せた（江馬 1953）。髪型は定型を破って自由に、個性を尊重した束髪が生じ、女性の髪も垂直で長い黒髪から断髪、ウェーブと赤毛染が流行し（江馬 1953）、モダンガールとして新しい時代を象徴するものとなった（高橋 1999）。

2. 衛生の啓蒙活動

衛生の概念は、明治維新政府が近代社会の形成に際して、民衆に対してとった西洋医学の普及の核として用いたものである（中寫 1990）。明治維新後の感染症の流行に政府が危機意識を持って防疫行政の整備を重要視するに至り、検疫制度、隔離病院、衛生行政機構、公衆衛生学、予防医学の発展、細菌学の進歩と薬品開発を生み出した（小野 1997）。加えて一般民衆への伝染病や衛生知識の啓蒙的活動のため、中央衛生会や地域衛生会など政府による対策の他に大日本私立衛生会（1883 年）、私立大日本婦人衛生会（1887 年）などが半官半民の活動組織として生まれるに至った（中寫 1990）。私立婦人衛生会設立の原動力になった女性たちは、荻野吟子のほか、岡田美寿子などの医療関係者や「名士夫人」などが含まれており、有識者階級の女性たちが主体的に結成した団体であった。会設立の一年後には婦人衛生会の会員数は男子賛成員も含め 112 名であった。東京都支部から徐々に地方へ広がり、明治 22 年には 350 名と増員していった。明治 33 年には 1,394 名の会員数を得、そのうち 5,600 名は看護婦で占められていた。これは、当時の看護婦たちの研修の場として婦人衛生会の存在があり、地方の支会の原動力となったのが医師たちであったことなどの事情による。婦人衛生会の会員数は明治 40 年の 2082 名以降は詳しく把握はできないが、大正期に公衆衛生思想の普及が図られ、国をはじめとする各行政機関、保健・医療機関による公衆衛生事業の展開等々が徹底し始めたころ、会は徐々に衰退していった。

『婦人衛生雑誌』は婦人衛生会の機関誌であり、1888（明治 21）年に初号が発行され、1926（大正 15）年までに第 382 号まで刊行された。総記事数は 3000 を超す。婦人衛生会設立の主旨を創設者の荻野は初刊で「何れの國を問はず國の富強を謀りますには衛生を普及するが第一で有」と衛生の重要さを述べている。掲載された記事の内容は多岐にわたり、女性を対象とする衛生教育のため、衛生に関する講演内容が多く、次に伝染病などの流行病に対する予防方法から

治療に関することや婦人病や妊娠、出産、月経などの医療から育児、家内清掃、料理、衣服など日常生活に関する記事が主に掲載されている。記事の内容は、当時の女子教育を支配した良妻賢母主義にのっとり、女の本分は家庭を守ることにあるという考えを根本においていた（岡 1981）。『婦人衛生雑誌』の頭髪に関する記事に注目した先行研究はないことから、清潔意識の変化やさらに近代国家による女性への矛盾する要請という上記課題に迫る資料として、本稿の分析対象とする。

3. 記事分析方法

分析対象は、第3号から第370号²（明治21年～大正12年）における頭髪に関する記事である。研究方法は以下の手順に従って検証した。

- 1) 婦人衛生雑誌に掲載されている頭髪に関する記載事項を全て抽出した。
- 2) 抽出した記事を「整髪」、「洗髪」、「美容」、「頭皮・頭髪の疾患」、「ヘアスタイル」、「諸外国に関する記事」にカテゴリ分類した。
- 3) 分類した中から『婦人衛生雑誌』の執筆者が女性の髪をどのようなものともなし、それをどのように変えるべきか、扱うべきかという啓蒙をしたのか、その背景を探った。

Ⅲ. 『婦人衛生雑誌』からみる女性の黒髪に対する変遷

1. 『婦人衛生雑誌』に掲載された頭髪に関する記事の概要

頭髪に関する記事は、39年間で69本掲載されている。記事の内容をカテゴリ別にし、一覧としたものが表1である。数量的に整理するにあたって、大カテゴリとして「整髪」「洗髪」「美容」「頭皮・頭髪の疾病」「ヘアスタイル」「諸外国に関する事」の六つを分類し、各カテゴリの記事数を図1に円グラフ化した。そのうち、「整髪」については「整髪方法」「頻度」「髪梳きに使っていた道具」、「洗髪」については「洗髪方法」「洗髪時に使用する材料」「洗髪

² 『婦人衛生雑誌』第1号から第382号のうち、頭髪に関する記事が第3号から掲載され、第371号以降は掲載されていない。そのため分析対象は第3号から第370号とした。

をする間隔」、「美容」については「美しい髪」「頭髪の養生」「髪油」「髪飾り」「髪染め」「理髪店・結髪師」「その他」、「頭皮・頭髪の疾病」については「疾患と疾患の原因」「予防方法」「治療方法」、「ヘアスタイル」については「髪型の歴史」「流行の髪型」「推奨されている髪型」「反対されている髪型」「髪の長さ・髪質」、「諸外国に関する記事」について、「諸外国の整髪」「諸外国の洗髪」「諸外国の美容」「諸外国でのヘアスタイル」とそれぞれに小カテゴリーを設けた。一つの記事に、複数のテーマが存在することもあるため、記事数とカテゴリーごとに分類したテーマ数は同様ではない。

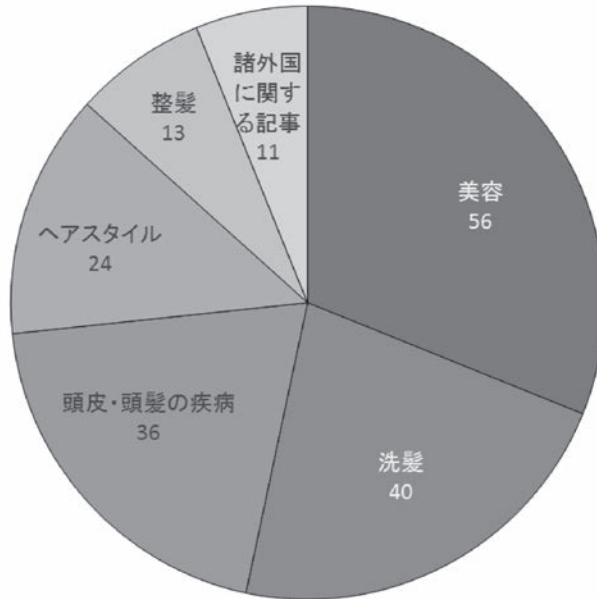


図 1. 『婦人衛生雑誌』 頭髪に関する記事数（主要カテゴリーのみ）

『婦人衛生雑誌』の誌面に掲載された頭髪に関する記事は実に多様であり、刊行当初より年を経るにつれて、増加し、明治 41 年から明治 45 年をピークに減少していくことがわかる。大カテゴリーでいえば、特に「美容」、その中でも特に「美しい髪」、「結髪師・理髪店」に関する記事が多く、次いで「洗髪」、その中で「洗剤」「間隔」に関する記事が最も多い。次に「頭皮・頭髪の疾病」、

その中で「治療」「疾患・原因」に関する記事が多い。

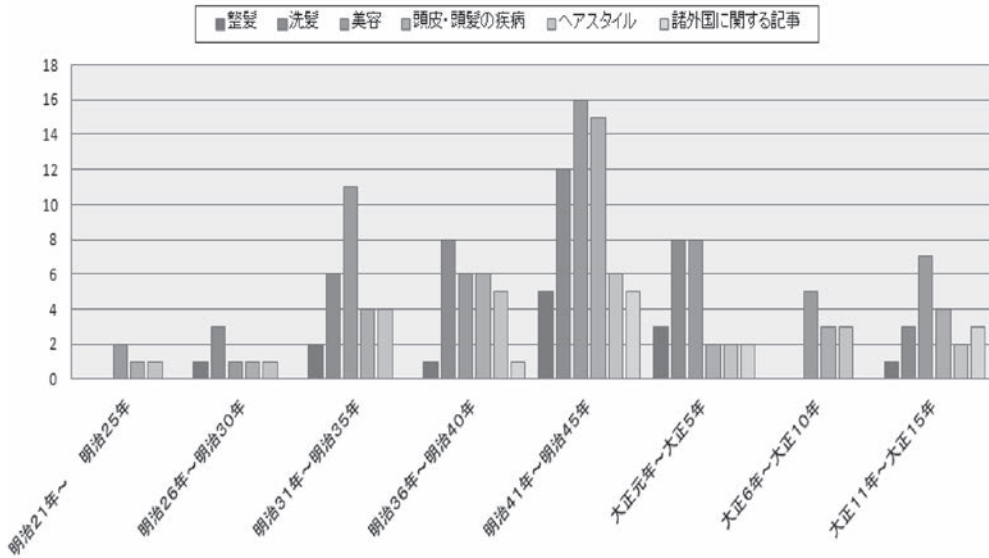


図2. 『衛生婦人雑誌』頭髪に関する記事数の変化（主要カテゴリーのみ）

六つの大カテゴリーを明治21年から大正15年までを数量的変化をグラフ化したものが図2である。データは、明治21年から明治45年までは記事の量が増大し、大正期には徐々に減少していることを示している。明治21年～明治25年頃に発行された一冊あたりの総記事数は平均で5本と多いものではなかったが、徐々に記事数も増え、明治45年には1冊あたりの記事数は平均で16本、20～30本ほどの記事が載ることも少なくなかった。しかし、大正期になると一冊当たりの記事数は減少し、20本を超えることはなくなった。その背景としては、創刊当初は衛生の定義や衛生思想の啓蒙活動の意義などを説く講演記事が多くを占めていたが、全国的な規模で清潔法の実施を促進していた明治中期は、婦人衛生会の総裁は皇族の女性に依頼し、さらに拡大を図っていた。記事内容は清潔を維持するための実施方法など具体的な記事が増加していった。しかし、大正期には公衆衛生思想の普及が図られ、国をはじめとする各行政機関、保健・医療機関による公衆衛生事業の展開等々が徹底し始めたことなどが記事数を減少させた大きな要因ではないかと思われる。加えて、当時の多くの

表 1. 『婦人衛生雑誌』執筆者の職種

| 職種 | | 数 |
|------------|------|-----|
| 医師系 専門家 | ドクトル | 4 |
| | 医学博士 | 8 |
| | 医学士 | 13 |
| | 医学生 | 10 |
| | 医師 | 2 |
| カモジ屋 | | 1 |
| 記者・肩書不明 | | 31 |
| 総数 | | 69 |
| 医師の割合 | | 54% |

婦人雑誌が広告を載せ、広告料金によって出版社が経営できるようになっていった（加藤 1989）。それに対し、女性へ衛生思想の啓蒙を目的として発刊した『婦人衛生雑誌』には広告を多く取り扱うことはなかった。会費のみで経営することは難しく、記事数の減少とともに廃刊に至ったと推察される。

これらの頭髪に関する記事の書き手は医学系専門家が多く、半数以上を占

めている。表 1 は頭髪に関する記事について、執筆者を職業別に分類したものである。大日本婦人衛生会の主な活動は講演会であり、7、8月を除き毎月 1 回学校などを借りて開催され（角田 2000）、官制の中央衛生会及び地方衛生会の活動のような医師中心の組織的な活動ではなく、あくまでも家庭内生活の衛生面での責任を婦人たちが持つことをうたい、婦人向けに講演会を多く行っており、この活動を補って『婦人衛生雑誌』が機関誌として出され、メディアとして啓蒙的役割を果たした（中畠 1990）。そのため、頭髪に関する記事も医師の立場から女性に対しての衛生面での啓蒙活動の一環であったことが推察される。明治期の婦人雑誌の主流は上流家庭の婦人を対象に良妻賢母を目標に掲げた家庭記事中心のものであった（木村 2010）。『婦人衛生雑誌』も上流階級の女性が読者の中心となっていたことはほかの婦人雑誌と同様であるが、上述したように会員の約半数は看護婦で占められ、地方の支会の原動力となったのが医師たちであり、執筆者の職種は医師が中心となっていた。「普通看護法」など看護法に関する記事が掲載されており、それらの執筆者は看護婦教育に参画し、教育に携わった者も含まれている（中井、佐々木 2011）。日本婦人衛生会の活動は女性中心であっても、当時の著名な医師たちの卓越した医療・衛生に関する知識を活用して普及を目指したことは『婦人衛生雑誌』の特徴である。

これらのデータを基に、女性の頭髪に関する記事がどのように提示されていたのか、その内容は時代によってどのように変化していったのかを、記述された価値観を数量化し、具体的に背景を含めて述べていきたい。

対象とする 39 年間の明治 21 年から明治 30 年までの明治中期、明治 31 年から明治 45 年までの明治後期、大正元年から大正 13 年までの大正期と三つの時期に分ける。第一期の特徴は、髪に対する記事が少なく、上流社会の女性に向け、女性の美しい髪とは何かを主に説くことにある。第二期は、頭髪に関する記事が最も多く、いかに頭皮・頭髪を清潔にするか、清潔に保つかといった具体的な方法など清潔の啓蒙が活発にされている。第三期の特徴は、衛生思想の普及とナショナリズム、西洋文化模倣の間に矛盾がみられることである。以上の時期ごとに、分析を行っていきたい。

1) 第一期 明治中期—日本の美しい髪と束髪の推奨(明治 21 年から明治 30 年)

まず、明治中期の髪についての背景を先行研究から述べたい。明治維新後、日本政府は近代化のために西洋諸国の文化を積極的に取り入れようと力を入れた。西洋文化の影響を受け、男性の断髪は断髪脱刀令後、1973(明治 6)年に明治天皇断髪を機に全国に急速に広がり、散切り頭が文明開化の象徴とされた。これに対し、女性の断髪は 1872(明治 5)年に違式誹違条例で禁止されて以来、厳しい取締を受け、女性が断髪しているというだけで、一定額の科料か、一日ないし二日警察署に拘留された(岡 1981)。しかし、鹿鳴館開館などの西洋文化を模した影響もあり、明治 18(1885)年、婦人束髪会が設立され、束髪啓蒙活動を行い、東京女子師範学校の教員や女子生徒が束髪を採用した。次第に髷を廃止し、束髪を広めようとする運動が全国に広まり、女学校を中心に束髪が広まっていった(平松 2012)。しかし、鹿鳴館の舞踏会や夜会に出るような洋装をおこなう上流階級の婦人や学生など一部をのぞき、根強く髷を結うための長い黒髪は封建時代を通じて女の美しさを象徴するものとされた(岡 1981)。

この期間の『婦人衛生雑誌』における頭髪関連の記事は 8 本である。テーマは整髪が 1、洗髪が 3、美容が 3、頭皮・頭髪の疾病が 2、ヘアスタイルが 2 であり、諸外国に関する記事はなかった。執筆者は医学博士、医学士が多い。記事の内容は頭髪に対し衛生を啓蒙する内容は少ない。

次にテーマごとに、その内容をみていく。整髪についての記事は 1 本のみであった。明治 27 年に出された記事(作者不明)では、「皮膚頭髪の如きも亦常

に清潔を要とす。毎朝頭髪を梳かすべし」³と婦人の頭髪の整髪について毎朝梳かすように書かれている。しかし、この記事では頭髪を清潔に保つために毎日できる方法は梳かすことであり、頭皮・頭髪を洗い皮脂や垢、においを取り除くことを推奨する内容は記載されていない。

洗髪については2本あり、明治26年に出された記事（作者不明）では、「暑気炎々の折柄は勿論毎月1回は必ず髪を洗うべし」と石鹼で髪を洗うよう推奨されているものの、毛髪のためにはうどん粉、そば粉を用いて汚れを落とすことを推奨している⁴。この石鹼の使用を推奨するのも婦人に対しての同様の記事は他になく、もう一本は子供に対しての記事となっている。

美容については3本あり、明治21年医学博士榊は、「女などは毛は是非に黒くなければならん。近来束髪などが流行るから赤い毛がいいかはしれぬがやはり黒いほうがいと云う人が多い」と、黒髪の美しさを称え、女性を美的な観点から評価しようとする提言が行われている。また、束髪により赤毛になることを懸念しており、利便性や衛生面よりも黒髪の美しさを重視していることがわかる。ここには、西洋を模した新しい束髪という髪型ではなく、江戸期から続き社会生活に根付いた丸髷や島田髷などの結髪で黒髪であることが美しいと位置付けられている。西洋化の影響により束髪が流行しているにもかかわらず、日本女性の黒髪は西洋的な美とは異なる日本の伝統的な美であるとされ、髷が正当化されている。

頭皮・頭髪の疾病については2本であり、明治26年（作者不明）の記事では、「日本の女の髪は多量の油を付くるが故に自然その洗い方を怠り安けれど、久しく洗わざる時は頭部の蒸発を防ぎために頭痛に悩まされ。」⁵と記載されており、当時の婦人は髷を結うために油を多量に使用していたにも関わらず、夏場でも月に一度だけの洗髪を推奨されるほど洗髪の頻度は少なく、臭いや頭痛に悩まされていたことがわかる。丸髷や島田髷などの江戸期から続く伝統的な結髪は、形が崩れないように多量の油で固められており、髪を洗う時には、髷を固めていた多量の油や付着した汚れを取り去るのに半日かかり、髷を強く固め、頭皮を引っ張るために頭痛を起し、またできるだけ髪を結び直さなくても良いよ

³ 『婦人衛生雑誌』51号 p.24

⁴ 『婦人衛生雑誌』46号 p.29

⁵ 『婦人衛生雑誌』46号 p.29

うにと、木製の高枕を使って眠るため熟睡できず、これでは不便であり、不衛生で、不経済であった（平松 2012）。それに加え、明治 28 年に医学士中根は婦人が丸髻や島田髻を結うために油を使い、悪臭がすることを述べている⁶。

ヘアスタイルについては 2 本であり、明治 22 年医学士大澤謙二が女子の外観について、「頭髪は束髪に結び」⁷と若い世代には束髪をするよう啓蒙しているが、明治 28 年医学士中根正次は、「日本の御婦人は丸髻とか島田髻とかそれぞれ御髪を御結いになります」⁸とここでも婦人は髻を結う日本髪が一般的にされており、束髪は根付いていないことがわかる。

これらのことから当時の婦人は、一般的には丸髻や島田髻などの日本髪を結うことが一般的であり、多量の油で固めた髻を結った日本髪は簡単に洗うことができなかった。そのため、洗髪を啓蒙する記事も少なく、洗髪が日常生活に溶け込んだ日課ではないことがうかがえる。しかし、女子には頭髪を清潔に保つために『婦人衛生雑誌』でも束髪を推奨している。ところが、束髪によって髪が赤くなることを懸念し、束髪が流行しているものの日本人女性としては赤髪ではなく、黒髪を美しいとし、束髪を否定している記事が混在していた。衛生を啓蒙する目的である雑誌の中でも、頭髪の清潔を重視するよりも、油で固め、悪臭や頭痛で悩まされ、動きにくく、安眠も取れず後には不潔さと結び付けられることとなる日本髪が美しいと述べられている。この時期には頭髪に関する記事そのものが少なく、衛生思想の啓蒙活動として清潔と頭髪を結び付けて考えられておらず、いかに美しい黒髪を保つかといった内容が強調され、衛生の啓蒙とは矛盾した内容になっていたことが推察される。

2) 第二期 明治後期—頭髪に関する衛生に対する啓蒙の最盛（明治 31 年から明治 45 年）

明治の半ばから日清・日露戦争に至るこの時期は、国家統一と軍事力強化のために帝国医療が実施され、明治 30 年に施行された「伝染病予防法」により衛生をめぐる議論や実践は大きく展開していく。明治政府は絶対君主の常備軍を確保するため、1873（明治 6）年に徴兵令を制定し、より多くの強い兵士の確

⁶ 『婦人衛生雑誌』65号 p.12

⁷ 『婦人衛生雑誌』7号 p.10

⁸ 『婦人衛生雑誌』7号 p.10

保を必要とした（大江 1981）。国家衛生という目的が、衛生思想の普及を必要とさせ、富国強兵を図る明治政府にとっては生権力を行使し、「生めよ、殖やせよ」、しかも強壯な男女を、という要請となる（小野 1997）。女性は丈夫な身体を保持して丈夫な子を産み、優秀な男子を育てる良妻賢母を生産するため、体操や水泳など体育が奨励されるようになり、女学生には袴が採用され、運動するのに便利な髪型で、汗をかき、汚れても洗しやすい束髪が採用された（平松 2012）。加えて、女子教育が推し進められ、明治 31（1898）年の女学生は全国で 8000 人ほどだったが、明治 43（1910）年頃には 5 万人に増加した（平松 2012）。また、都市衛生のため明治 31 年に一部で上水道による給水が開始され、明治 44 年には東京市内で全工事が完了（永島 2009）するインフラストラクチャー整備によって環境も変化していった。

この期間の婦人衛生雑誌における頭髪関連の記事は 42 本であり、もっとも記事数が多い時期であった。テーマは多岐にわたり、整髪が 8、洗髪が 26、美容が 33、頭皮・頭髪の疾病 25、ヘアスタイルが 15、諸外国に関する記事が 6 であり、洗髪、美容、頭皮・頭髪の疾病が多く、頭髪に関する衛生の啓蒙活動が最盛であった。また、第一期にはなかった諸外国に関する記事が登場し、欧米諸国を模倣するような記事が出てきたことも特徴である。執筆者はドクトル、医学博士、医学士、医学生から肩書が不明なものもあった。次にテーマごとに、その内容をみていく。

整髪については 8 本であり、髪梳きについて 3 本、整髪の間隔について 2 本、整髪の道具について 3 本であった。明治 35 年に出された医学士久保による記事では、日本髪を結ったままにしておくとう頭痛を引き起こし、血行が悪くなって禿げの原因になるため、ときどき髪を梳いて風通しを良くするよう書かれている⁹。類似の記事は明治 41 年医師佐々岡の記事にも見られる¹⁰。記事内容は第一期とあまり変化がないが、明治後期は整髪よりも洗髪に関する記事がかなり多くなっていく。

洗髪については 26 本であり、洗髪の間隔について 10 本、洗浄剤について 13 本、洗髪方法について 3 本であった。明治 34 年、医学博士土肥は月に 2、3 度

⁹ 『婦人衛生雑誌』154号 p.32

¹⁰ 『婦人衛生雑誌』219号 p.35

は洗うよう推奨している¹¹。洗髪を行う頻度について、明治 38 年、医学士寺田は 2 カ月に一度洗うのが通例であるが月に 2 回洗う必要がある¹² と述べ、医学生 A.B. も 2 週間に一度の洗髪を推奨している¹³。明治後期になると未だ 2 カ月に一度が通例ではあったようだが、月に 2 回程度洗うことが推奨されるようになった。

洗浄剤については、明治 34 年、医学博士の土居による記事で、「うどん粉に卵に布苔、是は皆さん普通の洗浄料です」¹⁴ と述べている。類似したものは他にも散見され、明治 38 年に出された医学士の寺田による「毛髪病之病」では、「皆さん方がお使用になって居る洗い粉であるとかうどん粉であるとか、又は鹿角菜、曹達、玉子、斯う云うものがありますから各自毛髪の性質に依って脂の強い者であれば曹達で洗うとか玉子で洗う」¹⁵ など 8 本がうどん粉、ふのり、たまごで洗うことが一般的であると述べ、かつ推奨されている。

石鹼の国内生産とともに洗髪洗剤にも石鹼が取り入れられるようになると、頭髪の洗浄に使用する洗浄剤を石鹼と推奨する記事は 11 本と増えた。しかし、当時の石鹼の質はあまり良質なものではなかったようで、明治 41 年、医学生 H.K. による記事では、「石鹼で洗いますと只毛髪の表面に粘着して居る油気許でなく、毛髪に大切な油気迄も持て行かれるので、夫が爲め軟らかに弾力のある生地を損じて毛には油気がなくなりすぎ、さわさわとして光澤もなく擦切れたり折れ易く成たりする患があります。平生はふのりなどで洗って、二月か三月目に一度位石鹼で激しく洗ふ様にすれば最も充分な方法である」¹⁶ と書かれている。しかし、ふのりやうどん粉を頭髪の洗剤として推奨する記事は明治 44 年まで続くが、それ以降は見られなくなる。明治 41 年には医学生 A.B. による記事で「洗うにも従来までは、ふのりだのうどんこだのをを用いて洗ったものですが、之等は却て不潔で有ります」¹⁷ と書かれている記事もあり、頭髪に使用されていた洗浄剤が大きく変化していったことがわかる。

子供の清潔を保つことも女性の役割として啓蒙されていた。明治 31 年、医学

11 『婦人衛生雑誌』 134 号 p.18

12 『婦人衛生雑誌』 186 号 p.10

13 『婦人衛生雑誌』 220 号 p.26

14 『婦人衛生雑誌』 134 号 p.18

15 『婦人衛生雑誌』 186 号 p.10

16 『婦人衛生雑誌』 229 号 p.28

17 『婦人衛生雑誌』 220 号 p.26

博士の三宅は「貧民の兒女でありますると、入浴も思うままに出来ませんで、極く汚い有様をして学校に参る、髪などが汚れて臭い頭をして教場に這入ってくると、室内の空気がそのために臭くなるのが有ります。」と清潔を可視化し、差別化している。それは、地域の中から清潔を外観で区別し、感染症などの流行の危険性が高いとされる「貧民部落」を浮上させ、そこに問題を押し付けることにも一役を買った（小林 2001）ことと重なる背景が読み取れる。

ヘアスタイルについては13本であり、現状や当時の流行したヘアスタイルの記事が6本、今までの髪型などヘアスタイルの歴史を記載した記事が2本、衛生の観点から推奨されるヘアスタイルについて記載した記事が4本、束髪を反対している記事が1本であった。明治32年には海外よりドクトル講師を招き講演にて、「日本婦人の丸髷、島田の如きは運動には尤も不適當にて乗馬などは思いもよらぬこととなれば矢張り束髪の方を勧告す云々」¹⁸「結髪のこと、日本の女子の髷は、活発の運動をするのに適せぬ。日本の髷を結って居れば、縦い丸髷でも、島田髷でも、結び髪でも、少し烈しい運動をするとバクバクになり、馬などに乗ると、一丁も征かぬ、中に解けてしまいますから、どうしても日本の髷では運動できない。」¹⁹と日本髪から束髪を推奨する働きがあった。明治32年に医学博士大澤による記事では束髪を「学校の生徒には随分見るようですが、市中の人にはあまり束髪を見ない。日本在来の髪の結い方と、束髪とは何方が宜しいかと云うに、どうも束髪の方が衛生の点からいえば宜しいと思います。併しながら束髪が非常に宜しいと云うのではない、多少衛生の目的に叶っているかと思ひます。」²⁰とあるように就学し体育がある女学生は積極的に束髪へと移行していった背景が見られ、衛生面からも推奨されてはいるが、婦人には普及していないようであった。

明治38年に出された医学士の寺田によると「私は束髪に付て賛成を致しますのは一は実益と一は衛生上からの点でありまして、此容易に結い得らるるものを髪結さんに托したり又前髷になまこ楼の心を容れたり油をコテコテ付ける人がありますが是は束髪の意義を解さぬのであるから可けませぬ、油を付ける必要もなく僅かの液体を付けて結んで居ったならば空気の流通も宜うございます

¹⁸ 『婦人衛生雑誌』 114号 p.31

¹⁹ 『婦人衛生雑誌』 114号 p.32

²⁰ 『婦人衛生雑誌』 117号 p.28

し髪を洗ふにしても雑作もなく出来ますから衛生上は至極宜いのであります、私を見たところでは束髪が最も宜いやうに考えます、又清潔を守る点からしても最も宜いやうです²¹ と、衛生面と経済的に簡易に結える束髪を推奨していた。しかし「讀賣新聞は此庇髪即ち当時の束髪を全廃しろと云っている、尤も讀賣は海老茶が大嫌ひださうであるからでもございませうが、元も束髪と云うのは西洋の婦人が多くは部屋に居る時に結ふ髪で根も結ばず油も付けず鍔で癖をつけて結ぶのであるか何時か日本内地に及ぼして来たので、兎に角新聞其他では、庇髪、二百三高地などなど悪口を言っている、是は私の考えでは束髪ばかりに對して言うのではないと思ひます、淡白に過ぎ寧ろ粧飾をせぬことを特色とし婦人には婦人たるの粧飾所謂美即ち婦人たるの身だしなみテフ訓條を忘却したるの謂であらふ、私も讀賣説には或る点に就いては賛成をして居る²² という記事も掲載している。これは、巧みな束髪をたくさんの油を使用したり、芯を入れたりして髪結師によって結われていた廂髪が全国的に広まっていたが、束髪本来の意味をなしていなかったからである（小沢 2013）。

廂髪のような派手に盛られた巧みな束髪は、西洋文化を積極的に取り入れた洋装をする上流階級の女性のみならず許される髪型に位置づけられていた（渡邊 2000）。これは束髪を世間一般への普及と発展の妨げを肯定するにほかならなかった（渡邊 2000）。そのため、下町には日本髪を好む人も多く、従来の髪型も根強く残った（大原 1988）。その上、鹿鳴館の終焉と共に束髪が衰退したことと、日清、日露両戦争で大兵力の動員と大兵力をもってする外征戦争を遂行した日本では戦時色を濃くしていくとともに、ナショナリズムも濃くなっていき、「西洋の模倣はやめよ、国粹に還れ」と戦争の影響から叫ばれたことも大きく影響した。

明治 37 年（作者不明）に、「全村の婦人挙って髪を断つ 滋賀県愛知郡西押立村にては独立布教員と称する一僧侶の演説に感じ全村の婦人一同十四歳より十八歳今を盛りの二十四五の者最も多く都合四十五名は緑の髪を根元より切捨てし上国家の多め軍人のために切捨つるものなりと記して全村なる親善光寺に納め戦勝の祈念を為し居るといふ哀れにも健氣と云うべし²³ と国家のために

²¹ 『婦人衛生雑誌』 185 号 p.16

²² 『婦人衛生雑誌』 185 号 p.16

²³ 『婦人衛生雑誌』 172 号 p.45

と戦勝祈願をしたり、「府下本所北二葉町にては町内の婦人中合せ髪結を廃し、其費用を醸金して其第一回の集金十八圓を兵員慰勞義會へ義けんしたりといふ」²⁴と金銭の出資を軍事費への寄付に向けるために髪結師に髪を結ってもらわなければならない結髪を廃止しようとする動きがあった。

明治 38 年医学士の寺田は、「近来は婦人の髪飾りが時局の為めでございますか一変致しまして、束髪と云う世界になって参りました、一時流行致しました金蒔絵の櫛、中差し、金銀の簪などは当節は鏡台の底に仕舞込んで仕舞ふやうになりました、年中流行に押廻されて髪飾りに百圓二百圓と惜まずに出した方々でも今では卅圓位が関の山であります、斯う云ふやうに僅かの飾りに満足致して居るのはコレモ時節柄軍費の調達であるとか救助費とかヤレ何であるとか云ふやうに随分出費がありますので、是等の関係から質素に傾いたものであるのでございませう」²⁵ と島田髻や丸髻の時に飾る簪や櫛を止めて質素な束髪を勧めている。ここには流行や衛生だけではなく、戦時中の軍事費を捻出するために質素儉約を国民に強いていた背景があった。

頭皮・頭髪の疾病については 25 本、予防について 5 本、治療方法について 11 本、疾患・原因については 9 本であった。ほとんどの記事が医師によって書かれ、雲脂に関して書かれた記事が最も多く、次いで脱毛・薄毛・禿頭に関して書かれた記事、次に皮脂過多、寄生虫（虱、白線、黄癬）、白髪、癬毛・縮毛、毛色の順である。それぞれに原因について詳しく書かれている。また、治療には食事療法から塗布薬が自分で配合できるよう分量を詳細に書かれている。これらは、病院や診療所で受ける医療ではなく、自宅で婦人が自分や家族に対して行える家庭看護が中心となっていた。

美容については 33 本であった。美しい髪について記載された記事は 11 本あり、『婦人衛生雑誌』が女性の頭髪に衛生だけでなく、美しさも同時に保つよう啓発されていたことがわかる。この頃の女性の頭髪について明治 40 年に医学士の渡辺は、「豊に長き黒き毛髪、髪が足らなくて他人の抜毛を入れねばならぬ人は美人とは云はれぬ、近来又西洋流になったから少し位は茶色で縮れ毛なのも却ってよいと云ふ人もありますが、之れは畢竟負惜みに過ぎないでしやう」²⁶、

²⁴ 『婦人衛生雑誌』 173 号 p.46

²⁵ 『婦人衛生雑誌』 185 号 p.12

²⁶ 『婦人衛生雑誌』 206 号 p.25

「漆の如き毛髪が房々と垂れて居る事」²⁷と記載されており、以前と変わらない日本髪の長い黒髪の美しさを唱え、ナショナリズムの伝統を背負い続ける女性像を推奨する内容が描かれている。

諸外国については6本であった。美容について3本、整髪について1本、洗髪について2本であった。主に西洋と日本との比較であり、明治41年、43年に焼き鰻を当ててパーマネントウェーブにすることが流行しているが日本では、「大禁物で、毛髪はなるべく素直にすらりと伸びたのに限る」²⁸と、ここでも西洋風のウェーブを否定し、禁止していることが書かれ、日本女性は日本の結髪が似合うまっすぐな髪がよいと推奨されている。

明治後期の第二期では、頭髪に関する記事そのものが増え、頭髪が衛生と結びついて啓蒙される記事が増えていた。しかし、衛生思想の普及を図り、インフラストラクチャーの整備、経済発展や技術の向上、国内生産の可能などにより石鹼が普及し始めるといふ大きな変化があったにもかかわらず、女性は健康であり、子供を産むことができることに加え、身体を清潔に保つことを求められた。そのために洗髪、整髪のしやすい衛生面と動きやすく、結いやすい利便性、お金のかからない経済性を含めた束髪を推奨するが、ナショナリズムと日本の伝統のなかで、不経済で不便な日本の結髪と黒髪を保持することを求め、西洋を模倣した束髪を否定する女性の美を提言する記事が多く掲載された。

『婦人衛生雑誌』の放つメッセージには身体に再生産能力を持つことを求められただけではなく、西洋風を批判し、外装にナショナリズムを求められ伝統を背負う美をも求める矛盾した内容が同時に含まれていた。このことから、束髪が一般の婦人には普及せず、廂髪や髷を結った日本髪がいまだ一般的に根強く残り、洗髪回数は増加するも日常生活の一部にはならず頭髪から清潔は程遠かった。

3) 第三期 大正期—美容の追求と衛生の啓蒙活動の衰退（大正元年から大正12年）

大正期には女性の新しい職場の増加により下層階級の女性だけではなく中流

²⁷ 『婦人衛生雑誌』208号 p.31

²⁸ 『婦人衛生雑誌』230号 p.40

階級の女性が家庭の外で職業を持ち社会進出した（田崎 1990）。社会進出を果たした女性は、明治後期に 90%を超える女子の義務教育就学率があり、初等教育だけではなく中等教育、さらに高等教育機関に進学する女性もいた。しかし、そこには同時に社会からの再生産の押しつけが根強くあった。女子教育の内容には良妻賢母論が強く打ち出され、良妻賢母の職分を尽くすようにすることが女子教育の使命であり、強国への道であると説かれた（渋川 1970）。良妻賢母に教育は必要と考えられていたが、欧化主義的な教育や高度の知的教育は必ずしも歓迎されていなかった（渋川 1970）。そこには、女性として家族に奉仕することが義務とされ、結婚すると同時に退職し、丈夫な子供を産み、今度は母親として教育的影響を与える存在となることが望まれていた。そのために多くの女性は短い勤続年数で、男女の賃金を含む待遇の差別の中での就労であった（田崎 1990）。

このような期間の婦人衛生雑誌における頭髪関連の記事は 19 本であった。テーマは、整髪が 4、洗髪が 11、美容が 20、頭皮・頭髪の疾病が 9、ヘアスタイルが 7、諸外国に関する記事が 5 であり、この時期は第二期と比べ、全体の記事数が少なくなり、特に後半にかけて洗髪や整髪に関する記事はほとんど見られなくなっていく。しかし、諸外国に関する記事数に大きな変化はないが、欧米諸国の情報を常に模倣し、第二期では西洋風束髪を否定していたにも関わらず、第三期では西洋風束髪を肯定している点が特徴である。執筆者はドクトル、医学博士、医学士、医学生のほか肩書が不明なものもあった。

テーマごとに見ていくと、整髪と洗髪についての記事はかなり少なくなっている。整髪についての記事は 2 本であり、テーマ別に髪梳きについて 2 本、整髪の間隔は 1 本、整髪の道具は 1 本であった。洗髪についての記事は 5 本であり、テーマ別に洗髪の間隔は 3 本、洗浄剤については 6 本、洗髪方法については 2 本であった。大正 3 年に記載された「毛髪を洗ふ事」という記事では「洗ふにも従来は、ふのりだのうどんこだのをを用ゐて洗つたものだそうですが、之等は却て不潔で有ります」²⁹と、明治後期まで一般的な洗浄剤として推奨されていたものが不潔であると否定され、ふのりやうどん粉などを頭髪の洗剤として推奨する記事はなくなった。また、大正 2 年に出された「毛髪の衛生」では「頭

²⁹ 『婦人衛生雑誌』 291 号 p.30

は一週間に一回づゝ洗ふ、最も良いのは緑石鹼で洗ふのが宜しい³⁰と石鹼で洗うことが推奨され、洗髪回数においても月に2、3回から週に1回と洗髪の頻度が増している。

ヘアスタイルでは記事は5本と減っており、現状と推奨されている髪型についてはそれぞれ一本である。大正3年に出された「毛髪を洗ふ事」の記事に、「日本の婦人は近来は西洋風の束髪が流行してきました」と変化を述べており、西洋風の束髪が定着してきており、ヘアスタイルに対する意識が大きく変化していったと考えられる。

頭皮・頭髪の疾患についても記事数は5本と少なくなっている。テーマ別に予防について2本、治療について3本、疾病・原因について4本であった。その中でも、大正6年に出された医学士古瀬の「理髪衛生」の記事では、「私は此の際自分の子供なり或は兄弟等を理髪店にやる場合には、其店が果して客毎に道具を替へて居るか、客毎に消毒した道具を使つて居るか観察して置くことが必要であると申し上げたい。一體理髪業に對しては理髪業取締規定が發布されて居まして、其の令に違反した者は警察處罰令に觸れると云ふことになつて、一通りの消毒は行つて居りますけれども、中には消毒を勵行せぬ向きもありますから、家族を出入させる理髪店は、一應下調べを致さなければなりません、又理髪道具の消毒は譯もないやうでありますなどである。」³¹と理髪店が頭皮・頭髪の疾患の原因や感染経路となっており危険であると述べている。また、大正11年に出された同じく医学士古瀬が記載した「理髪の衛生」では、「子供が學校に参りますと帽子取りや、角力や放りはなしにして勝手な眞似をして遊んで居りますから、一人の子供が白雲に罹つて居ると、他の子供が忽ちに之に傳染することは見易いことであります。」³²と学校にも感染の可能性があることを述べている。加えて、子供や夫など男性が行く理髪店での注意事項や感染の予防方法が細かく記載されていた。これは、既婚女性に対し家族の衛生を守るものは妻として母としての女性の役目であり、良妻賢母が求められ続けていた背景があった。

明治期から始まった大量の質のよい国民養成が女性に期待された。啓蒙され

³⁰ 『婦人衛生雑誌』 282号 p.53

³¹ 『婦人衛生雑誌』 337号 p.45

³² 『婦人衛生雑誌』 383号 p.11

た賢母論は、日清戦争後の高揚した国家意識の中で、さらに良妻賢母の育成の必要性を盛んに唱える女子教育論が国家的利益として存在した（小山 1992）。それは『婦人衛生雑誌』の啓蒙にも表れ、子供や夫が通う理髪店や学校での頭髪の清潔さえも女性の責任として強調されるようになった。

第三期、大正期は日本の経済発展が大きく頭髪の清潔に影響を与えた。江戸中期には洗濯石鹼は動物の脂肪と灰を煮て作られており、皮膚には刺激が強すぎたために洗髪には不向きであり、明治後期の庶民には、うどん粉やそば粉で洗うことが一般的であった。明治5年には洗濯石鹼の国内生産が始まっていたが、化粧石鹼は輸入でも少なく、貴重で大変高価なものであった（矢島 2002）。それまで輸入をするか、小規模での石鹼製造であったが、明治42年に石鹼製造が工業化し（ライオン株式会社社史編纂委員会 2014）、日清、日露戦争を経て日本の産業は、第一次世界大戦を契機に飛躍的な発展を遂げ、化粧用石鹼以外、とくに洗濯石鹼は国内市場のみならず国外市場への進出を強め（落合 1984）、一般の家庭に向けて価格の安い国産の石鹼が発売され庶民でも石鹼が手に入るようになった（矢島 2002）。この石鹼の普及によって黒髪の清潔に対する啓蒙活動は大きく変化し、洗髪が容易になって洗髪回数が増え清潔が身体化してきたことが伺える。加えて欧米の影響を受け、女性が自立し自ら求めていく美があったが、良妻賢母と社会に都合のよい伝統的な日本の女性像から完全に開放されたわけではなかった。しかし、女性もまた婦人衛生会の事例のように自ら創られた「伝統的な日本の女性像」を求め、そこに新しい日本の女性としての主体性、自らの存在域を実現しようとしたのである。

IV. 結論

明治期中期に発刊された『婦人衛生雑誌』に掲載された頭髪に関する記事の内容を検証し、明治中期から大正末期の黒髪の清潔がどのように時代の影響を受け、変遷したかを検証した。

明治中期に女性誌の発行が相次いで行われた中で、『婦人衛生雑誌』は衛生思想の普及を目指した啓蒙活動と家庭の衛生を守る良妻賢母を育む女子教育の一

環として位置づけられていたということが出来る。明治維新から始まった国家統一と軍事力強化の為に取組まれた富国強兵は、少ない諸外国の情報から西洋の模倣を試み、帝国医療の生権力の中から説かれた衛生思想の普及を目指し、清潔にする方法としての整髪や洗髪だけではなく、髪型にも強く影響を与え女性の身体に介入した。そこには清潔であればどのような髪型をしていてもよいというわけではなく、男性から評価される美しい黒髪を求められる美的対象かつ日本の伝統を担う者としての女性の在り方を背負わされた矛盾した状態が内面化していったであろうことが推測される。

加えて日清戦争、日露戦争によってナショナリズムを強めたことは女性の簡素化で洗髪がしやすい衛生的に保てる束髪から伝統的な日本の結髪に後退させた。その上で再生産できる身体と良妻賢母を求められ、富国強兵の担い手としての責任を負わされた。それは経済的に向上し、女性が社会進出を果たした大正時代も変わらずに男女不平等の中で求められ続けた。しかし、石鹼の国内生産が始まり、石鹼製造が工業化したことで庶民に石鹼が普及したことと上水道の整備は黒髪の清潔に大きな影響を与えた。加えて、初等教育の普及と識字率の上昇、経済の発展は職業女性を産み出し、伝統的な女性から女性自ら求める美が生み出され、女性の髪型は日本の髷を結う結髪から簡易な束髪へと変化し、それに伴って洗髪習慣も変化し清潔の定着化がなされていった。

『婦人衛生雑誌』が発行された当時の女性の就学率と識字率の低さからみると、全ての女性を対象としたものではなく、初期は教育を受けることができ雑誌の購買力がある上流階級へ向けた限られた階層を対象としたものであった。それは、発刊当初から衛生や簡便さから束髪を推奨していたが、庶民は伝統的な日本髪を結い続けていたことや容易に手に入ることのない石鹼や鶏卵で頭髪を洗うことを推奨していたことから読み取れる。

また、大正期には日本衛生婦人会の会員の多くが看護師であった。このことから、大正期の黒髪の清潔は看護師が普及員であったと考えられるが、当時の看護の位置づけが家庭における看護に特化しており、看護師の地位が低く、未確定であったことや、看護師が頭髪に対して何らかの実践を行ったかわかる記事は掲載されていない。加えて、婦人衛生会の組織は女性を中心となって設立したが、『婦人衛生雑誌』の記事の書き手の多くは男性が担っていたことから、

男性が求める黒髪の清潔を支持し、読者である女性が内面化していったことは否めない。今後は、女性が自ら規範を内面化し、ほかの女性や子供たちにどのように普及したか、一般の女性にとって髪は清潔が、どのような価値があり、どのように扱われていたか一般誌を含めて幅広い視点を加えて検討することを課題としたい。

引用文献

- 江馬務, 1953, 『日本結髪全史』創元社.
- 橋本澄子, 1981, 「結髪を歴史をふり返って」, 南ちゑ編『日本の髪型』紫紅社, 157-164.
- 平松隆円, 2012, 『黒髪と美女の日本史』水曜社.
- 飯島伸子, 1986, 『髪は社会史』日本評論社.
- 角田聡美, 2000, 「女子体育における身体への政治 『婦人衛生雑誌』の分析を中心に」, スポーツ社会学研究, 8, 73-85.
- 加藤敬子, 1989, 「女性と情報—明治期の婦人雑誌広告を通して—」, 新聞研究所年報, 32: 31-58.
- 木村涼子, 2010, 『<主婦>の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館.
- 小林丈広, 2001, 『近代日本と公衆衛生—都市社会史の試み—』雄山閣出版.
- 小山静子, 1992, 『良妻賢母という規範』勁草書房.
- 中井芙美子, 佐々木秀美, 2011, 「明治期『婦人衛生雑誌』に掲載された普通看護法と明治期女子教育の意義」, 看護学統合研究 12(2), 1-18.
- 中寫邦, 1990, 「近代日本における婦人衛生の位相—『婦人衛生雑誌』の背景—」, 近代婦人雑誌目次総覧 I期 第5巻, 1-12.
- 落合茂, 1984, 『洗う風俗史』未来社.
- 岡満男, 1981, 『婦人雑誌ジャーナリズム』現代ジャーナリズム出版会.
- 奥野克己, 2006, 『帝国医療と人類学』春風社.
- 小野芳朗, 1997, 『<清潔>の近代』講談社.
- 大江志及夫, 1981, 『徴兵制』岩波書店.
- 大原梨恵子, 1988, 『黒髪は文化史』築地書館.
- 小沢建志, 2013, 『レンズが撮らえた150年前の日本』山川出版社.

- ライオン株式会社社史編纂委員会編，2014，『ライオン 120 年史』ライオン。
- 渋川久子，1970，『近代日本女性史①教育』鹿島研究所出版会。
- 鈴木由加里，2002，「美しさ」という規範—ジェンダーと美の神話—，『日本の化粧文化—明治維新から平成まで—』資生堂，131-147。
- 鈴木正幸，2010，『化粧とあぶら』，Biostory，14，46-51。
- 高橋康雄，1999，『断髪する女たち—モダンガールの風景』教育出版。
- 高階秀爾，2015，『(美の季想) 春の黒髪 想像かきたてる魅力の源』，5 面，朝日新聞。
- 田崎宣義，1990，「女性労働の諸類型」，女性史総合研究会編，『日本女性生活史 4 近代』財団法人東京大学出版会。
- 渡邊 友希絵，2000，「明治期における「束髪」奨励—『女学雑誌』を中心として」，『女性史学』10，49-63。
- 矢島美保，2002，「洗淨文化史の変遷を探って」，入江良行編，『日本の化粧文化—明治維新から平成まで—』資生堂，201-207。

Black hair and Cleanliness –An analysis of magazine articles an “Fujin eisei zasshi” from Meiji era to Taisho era-

Yokoyama Tomoko

This study investigates the contents of an article entitled “hair” published in “Fujin eisei zasshi”, a magazine from the Meiji era, and explore how to change in the time have effects on the cleanliness value of Japanese female hair.

The policy of measures to enrich and strengthen a country worked on for armaments reinforcement and unification in the period tried Western imitation from a few information of the foreign countries, aimed at the spread of hygiene thought the power of empire medical care, and then intervened in the body of the woman. It was strong and affected not only a haircut and the shampoo as the method to keep clean but also the hairstyle. However, the hair was not just clean, it was supposed what the state that contradicted it that was made to carry the way of the female inside as the aesthetic object which beautiful black hair and a Japanese tradition.

However, domestic production of the soap began, improvement of the infrastructure, the spread of elementary courses and a rise in literacy rate, the development of the economy came up occupation female changed the woman beauty to demand it by own self from a traditional female. In addition, the shampoo custom changed with it, and entrenchment of the cleanliness.